

## 禍福は糾える縄の如し ～春セメスターをふりかえって～

伊藤 陽一（本学教職研究科准教授）

2020年度の春セメスターは、何とか無事に終えることができました。本大学院では、新型コロナウイルス感染拡大防止の為、4月の授業は休講（課題レポート提出）とし、5月からはZoom等によるオンライン授業を行いました。ほぼ同時期、本大学院2回生は、専門実習科目である「教職専門研修2」に取り組みました。連携協力校が休校していた4月5月は、自己の研究課題や大学院から提示された課題レポートを在宅で行い、学校再開後の6月は、学校現場で研修を行いました。これは、ひとえに教育委員会ならびに各連携協力校のご理解ご協力の賜物であり、この場をお借りし心より感謝申し上げます。

さて、この春セメスターは、新型コロナウイルスという予期せぬ「禍」に対して、予期せぬ対応策「福」が求められた4ヶ月間であり、大学院、院生共に激動の期間でありました。そこで、春セメスターをZoomによる「オンライン授業」と「教職専門研修2」から振り返り、ポスト・コロナについて考えてみたいと思います。

先ず、Zoomによる「オンライン授業」の実践から。私は当初、Zoomによる「オンライン授業」のイメージがなく、Zoomの操作方法も知らず、不安感を抱いていました。しかし、こうした機会でもなければZoomに触れることはない、これは私自身の新しい学びの機会だと自覚し、やるしかないと覚悟しました。今では、同僚の方々の手厚いサポートにより、何とかZoomの基本的な操作は身に付け、授業を進めることができるようになりました。（まだまだ未熟者です。）

そこで実感したことは、Zoomによる「オンライン授業」は、教員と院生、院生同士、教員同士で、フランクに会話や対話が可能であるということ。現時点において、院生達と繋がる事が出来る貴重な手段であるということです。特に入学後ほとんど繋がる機会が少なく、寂しい思いをしていた1回生にとっては、画面から個々の表情を見るだけでも大変有意義であり効果的であったと言えます。

さらに実感したことは、Zoomによる「オンライン授業」が、院生達のポスト・コロナの学びに影響を与えたということです。院生達は、Zoomによる「オンライン授業」を受ける側として多くのことを感じ、Zoomで模擬授業を実践することによってその効果と課題を学びました。それは、オンラインとオフラインを統合した持続可能な授業づくりに取り組むことの意義と重要性を認識し、今後の教員としての資質・能力の育成に不可欠であると意識化できたと確信しています。

次に「教職専門研修2」では、学校現場が児童生徒に対して実にきめ細かく丁寧な対応をしていることを目の当たりにしました。学校現場は、休校期間中から児童生徒の家庭学習や生活習慣の実態把握と手立て、何より心のケアに尽力されていました。そして、教育活動の段階的再開に向けて、児童生徒が安心して登校し、学校生活が送れるよう三密を避けること以外にも様々な配慮と工夫を行っていました。

2回生は、そうした難しい環境の中、学校教育に懸命に貢献していましたが、自己の研究課題解決にすんなりと取り組めることは出来ず、テーマや方法の変更が余儀なくされました。それでも2回生は、研究テーマと何度も向き合い、創意工夫しながら取り組んでいました。改めて、私も学校や教職員の切実な思いや願いに触れ、ポスト・コロナにおいて主体的・対話的な学びの創造や学級経営・生徒指導の在り方について考え直す良い機会となりました。

8月下旬からは、1回生による「教職専門研修1」が始まり、秋学期の授業準備もあります。糾える縄の如く、ポスト・コロナショックにおける授業や学級経営について問い直し、予測不能な時代に求められる教員の資質・能力の向上に取り組むたいと思います。

最後に一つだけ。コロナショックを「福」へ導くためには、小中高校での「30人学級」の早期実現を望んでやみません。